

第121回 三方限古典塾（'16, 11, 17）

洪 自誠（1561～1616）「葉根譚」（その3－38）

1 人生は、太だ閑ならば、則ち別念竊かに生じ、太だ忙ならば、則ち真性現われず。故に士君子は、身心の憂いを抱かざるべからず。亦風月の趣きに耽らざるべからず。後集 117

（意識） 人生はあまりに暇がありすぎると、気づかないうちに雑念が生じてくるし、反対にあまりに忙しすぎると、本来の自分というものを見失ってしまうものだ。

だから人間は、身と心の憂いはあったほうがいいし、また一面では風流を楽しむことの余裕もなければいけない。

（余説） 閑は閒になっている本もあります。人間、あまりに暇すぎると、心に穴が開いて不純なものが入ってきて、自己規制が難しくなるものかも知れません。

では、忙しければよいのか。確かに忙しいければ、雑念など入ってくる余地はないでしょうが、本来の自分というものや、何のために生きているのかなどを見失ってしまうことになります。そこで一方では、風の流れや月の景色に思いを致したり、短歌や俳句などの風雅の境地を保つことも忘れないようにする。要は何事もほどほどにして、心のバランスを保つことでしょうが、昨今の長時間労働の問題など難しいのが現実です。

（参考）大学・伝6章「小人閑居して不善を為す。至らざる所なし。君子を見て而る后厭然として、其の不善を拵いて其の善を著わさんとす。」

（つまりぬ人間は、一人でいる時にはどんな悪事でもやっつける。だが君子を見ると、その不善を覆い隠して、あたかも善行をしているかのように偽装する。）

2 世人は、榮利に纏縛せられて、動もすれば塵世苦海なりと曰う。知らず、雲白く山青く、川行き石立ち、花迎え鳥咲い、谷答え樵謳うことを。世も亦塵ならず、海も亦苦ならざるに、彼自から其の心を塵苦にするのみ。後集 121

（意識） 名誉や利益のみにとらわれた人は、ともするとこの世は汚れているとか、苦勞ばかりの世界であるとか言いがちである。だが、雲は白く山は青く、川は流れ岩はそそり立ち、花は咲き鳥は鳴き、谷はこだまし木こりは歌うというようなすばらしい世界もあるではないか。この世自体はけっして汚れてもいないし、苦しみの世界でもないのに、そうさせているのは、彼ら自身の心なのだ。

（余説） 先月学んだ「人生の福境禍区は、皆念想より造成す」（後集108）の御浚いになります。「人生は心一つの置きどころ」でもありました。そうは言っても、別に名利にとらわれていなくても、汚いこと辛いことが多々あるのがこの世の現実です。しかし、時が育んだ“ことば”の数々、神業とも思える自然界の姿、人々の心温まる多くのエピソードなど、すばらしいことにも満ちています。そういった面にできるだけ目を向けて、心豊かに暮らしたいものです。

（参考）島津日新公いろは歌

「少しきを 足れりとも知れ 満ちぬれば 月もほどなく 十六夜の空」
积月照「男兒立志出郷関 学若無成死不還 埋骨何期墳墓地 人間到处有青山」
（男兒志を抱きて郷関を出るず 学若し成る無くんば死すとも還らず
骨を埋むるに墳墓の地何ぞ期せざらん 人間到る処青山有り）

3 分に非ざるの福、故無きの獲は、造物の釣餌に非ずば、即ち人世の機阱
なり。此の処に眼を着くこと高からずば、彼の術中に墮ちざること鮮し。
後集 126

(意識) 己の身の程に不相応な幸運や、正当な理由がない授かり物は、天がその人を試すために釣り上げようとする餌でなければ、人生に仕掛けられた落とし穴である。

そのような場合には、目の付けどころをよほど高くしておかなければ、天や人生の術中に、はまらずにはおられないであろう。

(余説) 「知足安分」(足を安んず)と言いますが、「分」とは果たして何でしょうか。辞書では「身の程、力量、なすべき務め」などとありますが、どの辺りを自分の分であると考え、これで十分とするのか、その時に当たって判断するのはなかなかです。また、天や神は釣り餌で人を試すようなことをする存在なのかも疑問に思います。

「夢を買う」はずの宝くじが、現実の自分をつぶさないために、一千万円以上の当選者には、当選金を受け取る際「その日から読む本」という小冊子を手渡されるそうです。

(参考) 老子第33章「人を知る者は智、自らを知る者は明、人に勝つ者は力有り
自れに勝つ者は強し、足るを知る者は富み、強めて行う者は志有り
其の所を失わざる者は久し、死して而も亡びざる者は壽」

4 一事起らば則ち一害生ず。故に天下は、常に無事なるを以て福と為す。
前人の詩を読むに、云う、「君に勸む、封侯の事を語る莫れ、一将功成りて
万骨枯る」と。又云う、「天下常に万事をして平らかならしめば、匣中に
千年死するを惜しまず」と。雄心猛氣有りと雖も、覚えず化して氷霰と為る。
後集 128

(意識) 何か新しい事を興せば、必ず新しい弊害が生じる。だからこの世は、何事もなく平穏であるのを幸いとする。古人の詩にも「どうか立身出世の話など話題にしないでくれ。一人の将軍が功名を立てた影には、幾万の兵の骨が戦場に枯れ朽ちる」と言うではないか。また別の詩には「この世が泰平であるのなら、名刀のこの私は、たとい千年箱の中でさびても文句は言わない」とある。これらを読むと、たとえ雄々しい心や勇猛の気象があったとしても、氷やあられのごとく解けて、知らないうちに功名心はなくなるだろう。

(余説) もちろん「戦争」などは論外ですが、「一事起らば則ち一害生ず」は、政策や事業、日常の出来事など多面で言えそうです。例えば「防衛関連法案」や「TPP法案」、
「原発問題」や「企業の海外進出」、「福祉政策の充実」や「少子高齢化社会」、「年金問題」や「外国人労働者導入」などでも言えそうです。

物事には常に表裏二面が存在しており、「何もしないことが最大の悪」とも言われます。悪があるから善というものがあり、醜があるから美が存在するのも真実です。

(参考) 呂坤・呻吟語(広諭)「一法立ちて一弊生ずるは、誠に是なり。しかれども生ずるによりて法を立てざるは、未だその是たるを見ざるなり。それ法を立てて以て弊を禁ずるは、猶ほ防を為りて以て水を止むるがごときなり。堤薄くし土疎にして、隙に乗じて決壊するは、誠にこれあり。未だ決するによりて防を廢する者あらず。弊なきの法は、堯舜と雖もあたはず。」(明德出版社版234p) 呂坤(1536-1618 中国・明)